

<アルゼンチン・リバープレートにおけるジュニア年代の取り組み>

「サッカー＝楽しい」を忘れずに！（レオナルド・ブスティ氏：アルゼンチン・リバープレート指導者）

育成年代で選手をスカウトする際に、まず重視しているのはテクニックだ。何か人と違った才能を探しているのだ。しかし、選手を選考するとき何よりも重要となるのが、その選手の「身体的成長」だろう。子供の成長には大きな差があり、特に9歳から16歳の間で顕著になる。

この身体的成長の違いというのは、ジュニアサッカーにおいて大きなポイントになる。なぜなら、この年代では同じカテゴリーなら大きな選手がどうしても目立ってしまうことが多いからだ。体が大きければ多少テクニックが不足していても、力でゴールを決めてしまうことができるし、ディフェンスでも当たりが強いので有利になる。

スタッフが未来を見据えずに、現状の能力のみを考慮して勝利至上主義に走った場合、多くは失敗することになる。「単に活躍すればいい」という考えでは、コンセプトがなさ過ぎるだろう。これは、大柄の選手が悪いといっているのではない。技術が備わっていなければ、未来で彼らが活躍していける可能性は低いということをいっているのだ。

アルゼンチンにもフィジカルが高い選手だけを集め、ジュニアやユースのリーグでたくさん優勝するクラブがある。しかし、我々の目的はジュニアやユース年代で優勝する選手を見つけることではなく、最終的にトップチームへ上がる選手の発見と育成である。

私は13年間リーベルにいるが、いまでもよく自問することがある。「なぜ、ジュニアやユース年代で我々に勝っていたチームが、その後トップチームにリバープレートから出ているオルテガ、クレスポ、ソラーリ、ガジャルド、アイマール、サビオラ、ダレッサンドロのような選手を送り出せないのか？」

そして現在、私なりに見えてある答えはこうだ。サビオラとダレッサンドロはリーベルで同じカテゴリーだったが、彼らの年代はリーグ戦で一度も優勝したことがない。さらに、彼らの才能は誰もが認めながら、体が小さかったのでレギュラーであったことはほとんどなかった。これは、コーチ陣が彼らのケガを恐れ、才能をつぶさないように育てていたからである。

つまり、チームとしてのコンセプトが「育成」と「勝利」では大きく違っており、育成年代でリーベルに勝っていたチームと比較したときのその後の選手の差が、これほどまでに大きくなっているのだ。

これはアルゼンチンだけでなく、世界のサッカーを見ても同じことが言える。つまり、少年期には体の大きさ以外にもテクニックをしっかりと観察し、どのくらいの伸びしろがあるかを把握しなければならないということだ。今は荒削りでも将来性のある選手を見抜くことが、スタッフに求められるのだ。

小さいときに体が小さくて負けてしまっても、16歳を過ぎればその差は縮まる。そのときに、テクニックがある選手とそうでない選手のどちらが優位に立てるかは、言うまでもないだろう。